Ⅱ 事業実施地域の取組

北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会
「特別支援学校における養護教諭の資質向上」
～児童生徒の障害特性や学校の実態に対応していくために必要な資質とは～

１　北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会

近年、北部特別支援学校の養護教諭の配置は年齢層に大きな幅がある。複数配置であっても若手同士だったり、臨時的任用同士だったり、各学校の特色や実態に応じた養護教諭の専門性を発揮しながら保健室経営を進めていくことに困難を感じている者が多いという課題もある。また、養護教諭に求められる役割が多様化している事、特別支援学校という特有の職務の難しさのなかで、養護教諭の迷いは大きいと感じる。

そこで、北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会では、「養護教諭が悩んでいては、自校の子供たちの健康課題が解決できない」と考え、本事業を活用し「健康課題解決検討委員会」を設置して「特別支援学校における養護教諭の資質向上」に取り組むこととした。

２　健康課題解決委員

女子栄養大学	教授	大沼　久美子
県立深谷はばたき特別支援学校	養護教諭	久保田　真奈美
県立秩父特別支援学校	養護教諭	森　美咲
県立熊谷特別支援学校	養護教諭	山本　可菜
埼玉県教育局保健体育課	指導主事	龍野　雅美
埼玉県教育局保健体育課	指導主事	澤村　文香

３　健康課題解決検討委員会【事前打合せ】

（１）日　時　令和５年７月２１日（金）午後３時００分～午後４時３０分
（２）会　場　深谷はばたき特別支援学校
（３）内　容
　ア　令和５年度埼玉県「学校における現代的な健康課題解決支援事業」概要について
　イ　北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会の健康課題について
　ウ　課題解決に向けた方策の検討
　　→保健室訪問（深谷はばたき特別支援学校）
　　→北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会研修会の開催

４　健康課題解決検討委員会【実施内容】

（１）保健室訪問

ア　日　時　令和５年８月２４日（木）午後１時３０分～午後２時００分
イ　会　場　深谷はばたき特別支援学校
ウ　内　容　ベテラン養護教諭の知恵（保健室経営・実践の共有）
エ　講　師　深谷はばたき特別支援学校　養護教諭　久保田 真奈美 氏

保健室訪問

保健室で実践している SDGs の便利グッズの紹介（子供たちの着替えに利用しているジャージや嘔吐物・失禁時に使用するディスポ布、頭部打撲時に使用する三角バンダナ、保冷剤を入れるリュック）と年度初めに実施している保健給食研修で使用している「保健給食ガイド」の内容及び職員への周知の仕方について説明。

（２）北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会研修会

ア　日　時　令和５年８月２４日（木）午後２時１０分～午後４時３０分
イ　会　場　深谷はばたき特別支援学校
ウ　内　容　特別支援学校における養護教諭の資質向上
～児童生徒の障害特性や学校の実態に対応していくために必要な資質能力とは～
エ　講　師
（ア）講義・演習①　講師　保健体育課　指導主事　澤村 文香 氏
事業説明
養護教諭育成指標について
育成指標「活用チェックリスト」の実施
（イ）講義・演習②　講師　女子栄養大学　教授　大沼 久美子 氏
課題解決にむけたグループワーク

令和5年度　埼玉県「学校における現代的な健康課題解決支援事業」

特別支援学校における養護教諭の資質向上

～児童生徒の障害特性や学校の実態に対応していくために必要な資質とは～

北部高等学校支部養護教諭会特別支援学校部会での取り組み

県立深谷はばたき特別支援学校
養護教諭　久保田真奈美

１　本事業に申請した理由

①昨年（令和４年度）から、特別支援学校養護教諭の「専門研修」が総合教育センターで開始された
　→特別支援学校に特化した研修が少なかった
②障害の特性は、学校や子供一人ひとり異なる
③複数配置は若手同士、臨時的任用同士が散見され、経験知の共有が困難

養護教諭が悩んでいては、自校の子供たちの健康課題が解決できない

～特別支援学校養護教諭の悩みと迷いは大きい！～

２ 取組内容

北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部　第１回研修会

１　日時　令和５年８月２４日（木）

２　会場　県立深谷はばたき特別支援学校

３　内容　「特別支援学校における養護教諭の資質向上
～児童生徒の障害特性や学校の実態対応していくために必要な資質とは～」

ア　講義・演習①

事業説明

養護教諭育成指標について

育成指標「活用チェックリスト」の実施

イ　講義・演習②　課題解決にむけたグループワーク

講師　女子栄養大学　教授　大沼久美子氏

○講義・演習①　養護教諭育成指標について

○講義・演習①　養護教諭育成指標について

育成指標活用チェックリストで自身のステージを認識した

教員等の資質向上に関する指標【養護教諭】　埼玉県教育委員会

日々の実践や研修に育成指標を活かす

活用チェックリスト

実践の積み上げイメージ図

	採用前	第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ	第4ステージ
ステージ	養成期	基盤形成・協力期	充実・推進期	深化・中核期	発展・後進育成期
	教員としての基本的な知識を学ぶとともに、自ら課題を発見して解決する姿勢を身に付ける。	教員として必要な事項について幅広く学び、基盤を固め、協力して取り組む。	経験を基に、資質を充実させ、幅広い視野を持ち、チームとしての取組を推進する。	自身の専門性を深め、学校の中核的存在として力を発揮する。	これまでの教育経験を振り返り、自らの知識や技能を発揮させ後進を育成し、学校運営を推進する。
埼玉県の教員として持ち続けてほしい資質	・常に自己研鑽に努め、自律的・主体的に学ぶ ・教育公務員としての使命を自覚し、高い倫理観と生徒等への教育的愛情を持つ ・豊かな人間性やコミュニケーション力・幅広い教養・視野を持ち、家庭や地域など誰とでも交流する				
保健管理	生徒等の実態把握と、適切な保健教育のための資料を提供している。	健康診断、救急処置、疾病予防等の保健管理が出来ている。 学校保健委員会や保健活動のキーパーソンとなり、日常の保健管理や指導体制の構築する。	校内において、指導的立場を果たすとともに、児童・生徒の健康課題の解決に向けて計画的に対応する。	学校における救急体制、心のケアの支援体制について、指導者的立場になって推進するように工夫を図ったり、学校組織を見直すなど、改善策を提案する。	保健管理の中核に立って学校内の体制構築や指導・助言を行い、後進を育成する。
	□保健管理の内容がわかる □保健管理の必要性がわかる □生徒等の実態を把握するための情報や方法がわかる □把握した情報を分析する方法がわかる □分析した実態を視覚化し、説明する方法がわかる	□健康診断、救急処置、疾病予防等の保健管理ができる □健康診断、救急処置、疾病予防等から自校の健康課題を読み取ることができる □自校の健康課題を学校保健委員会や職員会議などを通じて、職員や保護者等に周知することができる □生徒等の心身の健康課題解決に必要な資料を収集、整理することができる □地域の医療機関や関係施設の	□専門的立場から、健康課題を把握し、解決のために校内の中核的役割を果たすことができる。 □保健部や生徒指導部などの校内組織を活かした対応ができる □保健主事や特別支援教育コーディネーター・教育相談主任、学校医・学校歯科医・学校薬剤師、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等と連携を図り組織的に対応することができる	□学校における救急体制、心のケア支援体制がすぐに機能できるよう、「チーム学校」を意識した危機管理体制を整備することができる □危機管理体制が機能するように学校内や関係機関と調整を図る等、指導者的役割をすることができる □危機管理体制に対し、学校経営を視野に入れた課題や改善策を見出し、提案することができる	保健管理の分野において □学校内で指導・助言や適切な情報提供ができる □地区の養護教諭部会等、地域において実践発表を行うことができる □地区の養護教諭部会等、地域において指導・助言を行うことができる □研修会等で指導を進めることができる

様々な経験を経て、自分の目指す養護教諭増に少しでも近づけるよう努力を重ねていこうと思った。

育成指標（チェックリスト）を行って感じたこと（年代毎）

赤字：フレッシュ、青字：ミドル、黒字：ベテラン

自分の向かうステージや、学校保健の幅広さ・深さを理解したことで見通しが立ち、具体的な目標設定に繋げることができた

養護教諭のプロとして自身がないのだろうと考えた時、私の価値観は本当に正しいのかという迷い、それをジャッジしてくれるスーパーバイザーが近くにいないという事なのかもしれません。

後進に伝える難しさを感じています。伝えるタイミング、伝え方、一方的に伝えてはいないか。理解しているのか。本人が知りたいものなのか。

養護教諭2年目として、自分の知識や経験の少なさに不安を感じることもありましたが、教員として、養護教諭としての基盤を固めたり、他の教員と協力して保健活動をしたりといった経験を積むことが大事なのだなと感じました。

前の学校ではできていたけれど学校や校種が代わると同じようにはいかず、ステージを進んでは戻りを繰り返しています。第２、３ステージがとても深く、広い気がします。でも、楽しみややりがいを感じるのもこの時期かなぁと思います。

〇講義・演習②　課題解決に向けたグループワーク（研修の流れ）

ステージ別（年代別）にグループになり課題を付箋に書き出す

→

課題を張り出しカテゴライズする

全体で共有

大沼先生から、課題に向けた方策について指導助言をいただく

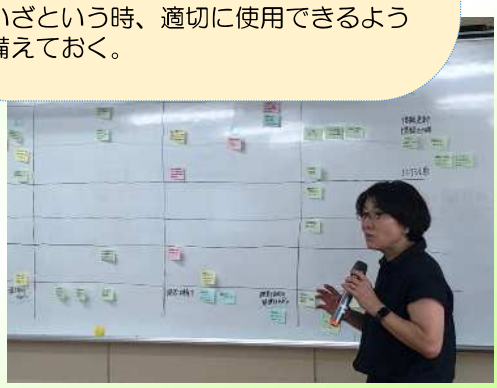
課題

①保健管理
＊応急処置など対応の判断が難しい
＊健康診断
　→障害特性を考慮した視力、聴力の実施方法
　→座ることも難しい子供への対応。
　（特に心電図検査や耳鼻科検診など）
　→受診・治療率の向上
　（受診が必要な家庭が受診しない傾向あり）
＊フッ化物洗口
＊医学の専門的知識や疾病の知識が足りない
＊情報が最新のものなのか、対応判断に自信がもてない
＊てんかん発作時の対応、ブコラム（抗けいれん剤）について

指導助言

基礎基本は変わらない。
まずは、基礎基本を確実に行う。

- ブコラムは、よだれが流れていても用法に基づいて確実に使用する。
- そのときにできること、やるべきことをしっかり行う。
- ブコラムが効かなかった時を想定して、主治医に予め対応を確認しておく。
- 研修に参加し日常の疑問を解消する。
- 正しい用法をシミュレーションし、いざという時、適切に使用できるよう備えておく。



課題

②保健教育
＊ＩＣＴの利用と活用方法
＊性に関する指導の教材の集め方
＊事例や教材の集め方
　など

指導助言

学習指導要領には、各学校が編成する教育課程の基準として、各教科等の目標や大まかな内容が定められている（特別支援学校においても同様である。）

- ICTは、利用することを前提に学校保健活動を考える。
- ICTは、６つの資質（保健管理・保健教育・健康相談/保健指導・保健組織活動・保健室経営・連携協働）すべてに関連可能。
- 保健室来室統計や健康診断統計は、ICTを活用して、学校保健委員会等で報告し実態を共有。
- 性に関する指導の教材は、児童生徒に何を、どこまで指導するのか、授業の「ねらい」「目的」を明確にすることで収集可能。
- 全ての保健教育に共通することは「目的」が大切であること。
- 目的、発達段階、指導方法、どんなアプローチするのかを考える。
- 各担任等が作成している年間指導計画等の把握は必要。養護教諭として、どの授業やどの場面で関わっていくことができるのか？　各担任等と話し合いながら進めていくと良い。

課題

③健康相談
＊精神的に不安定な子供が多い
＊どこまで保護者に伝えて良いかわからない
　など

指導助言

保護者を含めてアセスメントをすることが大切

- 児童生徒を取り巻く環境（社会的アセスメント）からニーズを把握することが重要。

課題

④保健組織活動
＊学校保健委員会のテーマ、進め方、盛り上げ方
＊生徒保健委員会の持ち方
　など

指導助言

児童生徒保健委員会は保健教育（特別活動）に位置づく（教育活動の一環）

- 児童生徒保健委員会が組織されていない場合は、保健係に活躍してもらうなど、それに代わるものを考える。
- 他校の実践を参考に、保健委員会の役割を校内に示し、保健委員会を組織する。
- 高等部から始めるなど、小さい組織から拡げていく。
- 学校保健委員会は、各回の「テーマ」「ねらい」を絞る。
- テーマに基づき、保護者や教職員から事前に質問をもらっておくのもよい。
- 学校保健委員会では、児童生徒や保護者、学校医の出番を設定し、事前に依頼しておく根回しが大切（準備8割本番2割）
- 何を結論に導きたいのか、見通しを立てておく。

課題

⑤保健室経営
＊担任が病気やけがではないのだから、保健室には行かないようにと言う
＊複数来室時の対応
　など

指導助言

担任と養護教諭の方針を擦り合わせる

- コミュニケーションを重ね、なぜ必要なのかを話し合う。
- 双方の妥協点を見出すコミュニケーション。
- 相手を尊重した人間関係づくり。児童生徒も教職員も「よさ」や「可能性」を引き出し伸ばす関わりが大切。

課題

⑥学校保健活動に関する連携・調整
＊校外行事における職員との連携の難しさ
＊地域と保健室の関わりが薄い
＊救急体制の認識の違い
＊教職員との温度差（感染症など）
＊養護教諭まち（判断）
＊ケース会議に養護教諭が呼ばれない
　など

課題

⑦その他
＊実践発表が難しい
＊講師とか助言とかやはり
　ちょっと自信がない
　　など

指導助言

学校の基準・方針を作る
・緊急体制については、研修の場を設定し、教職員の役割を明確にする。
・誰が指示を出すのか明確にし、日常から役割を遂行してもらう「声かけ」
・役割を遂行できたらほめる！
・「ありがとう、助かりました！」
・ケース会に呼ばれないときは、「私も参加させてください」と表明。（待ちの姿勢から主体的な姿勢へ）

指導助言

実践発表などは「為すことによって学ぶ」ところが大きい。経験値を上げる
・発表は「背景，目的，方法，結果，考察、まとめ」などプロセスがある。
・指導・助言は、
①良いところ（できるだけ多く）
②「あえて言うならば」（1つ）
をあげる。良いところをたくさん挙げることが大切。

研修会の感想と学び（年代毎）赤字：フレッシュ、青字：ミドル、黒字：ベテラン

今まで全く経験がない特別支援学校の養護教諭として働き、これで正しいのか、こんなことで悩んでいるのは自分だけだろうと思うこともあったが、グループワークで話し合ってみると、意外にも自分の悩みに共感してくれたり、似た悩みを抱えていたりということがあって驚いた。

若い時期には、若い時の悩み、中堅には中堅の悩み、ベテランにはベテランの悩みがあり、また知的とは違う肢体だからこその悩みも聞けてとても良かったです。

「特別支援学校で活用できる保健教育の実践事例が知りたい」と出させていただきました。それに対する大沼先生からのアドバイスで、ただ事例を知るだけでなく自分が目指す保健教育の目的やねらいを明確にすることで、より実態に合った保健教育を目指すことができるよと教えていただき、とても勉強になりました。９月から歯科保健指導も始まるので、今回学んだことを踏まえながら実践していこうと思います。

また、特別支援学校では教職員がたくさんいる分、さまざまな場面で様々な職種の方と話し合うことがあります。そのような時でも根拠のある「ねらい・目的」を提示し、たくさんのコミュニケーションを重ね、妥協点を見つけていくことが大切であり、同じ方向を見ながら子ども達の健康課題を解決していく事が何より重要であるということを講義していただいたのもありがたかったです。

どんなに経験豊富な養護教諭の方でも、自信がないと話していたことや、養護教諭は謙虚な人が多いという話がグループワークであがったことも印象的でした。

年齢が近い先輩と悩みを共有することでお互いに同じような悩みを持っていることを知り、共感する事が出来て少し安心しました。第３・４ステージの先輩方の悩みは、自分と似ている悩みもあれば、経験が長いからこそのより具体的な悩みもあって、将来の自分を見据え考えることが出来ました。

多種多様な教職員がいる中で、学校保健活動をしていく養護教諭として、全てを養護教諭が直に実践するのは難しいので、いかに多種多様な教職員が協力して学校を安全安心な場所にしていくために、養護教諭の「伝える力」が必要だと改めて学ぶことができました。

今回の研修目的であった「どこの校種にいてもどの年代であっても養護教諭の専門性から自校の健康課題を解決できるようになる」という意識は参加者全員が共通認識できたことと思います。大沼先生が講義の中でおっしゃっていただいた「その時にやるべきことをしっかりやる。」このことに尽きると感じました。特別支援学校と一般の学校の違いは、子ども達の特性が多様であること、教職員の数が多いということだけで、養護教諭の職務というのは少しも変わりがない、工夫はいるけど、アプローチの仕方がちょっと違うだけということも共通認識ができました。

２学期の目標を立てる！～スキルアップのために～

（年代毎）赤字：フレッシュ、青字：ミドル、黒字：ベテラン

・保健教育について、担任の先生と連携を取りながら、発達段階にあわせた内容や教材を見つけて、授業できるようにする。
・行事（校外宿泊や文化祭）が多い学期なので、保健部の先生方を中心に、子どもたちの健康や安全について、全校で見守ることができるように行動していきたい。

・学習指導要領をもう少し読み込みます。児童生徒の生活の中で保健を取り入れていけたらと思います。
・歯科治療率を上げたいので相方と相談して作戦をたてます。黄色い治療勧告、赤い治療勧告と段階的にするとか・・・アプローチをして本人、家庭を動かしてみたいと思っています。

・初めての宿泊行事引率に向けて、準備を万全にする！
・一人一人のねらいに合った個別の歯科保健指導を行う！

・まずは、自分の心とからだが元気であること。
・なにごとにも、誠実にそして丁寧に。

中堅研修を通して、養護教諭の専門性を高めたい。
課題研究を行うことで、特別支援学校の保健教育について理解を深めたい

・あらためて、子どもたちの障害特性や実態把握の情報収集する。その情報を養護教諭ふたりで共有し、何をしてあげたらいいのか、どんな知識が必要なのかを見つける。

・行事が盛りだくさんなので、相方と協力して乗り切る●
・資質向上のために、本や資料、研修会を通して自己研鑽に励む。

・地球にやさしく、皆に温かさを届ける保健室。

・保健室に来室する児童生徒のために、担任の先生方とのコミュニケーションをとり、来室理由や頻度をデータ化してみる。保健室が学校にある意味を先生方に理解してもらえるようにする。
・ケース会などで出したい意見や現状をまとめ、保健室から日程を伺うなど関係者に提案していきたい。

・子供が「何を求めているのか」を考えながら関われるようにする。
・会話やコミュニケーションを大切にし、スムーズな連携につなげる。

３ まとめ

特別支援学校と一般学校の相違点

＊子供たちの特性が多様である

工夫はいるけどアプローチの仕方がちょっと違うだけ
特別支援学校での工夫は「ユニバーサル」（他の学校種でも万能）

＊教職員が多い

根拠のある「ねらい・目的」を提示し、たくさんのコミュニケーション（ほめる）を重ね、妥協点を見つけていくことが大切。同じ方向を見ながら子ども達の健康課題を解決していく姿勢が何より重要

●どの学校種であっても養護教諭としての仕事はなんら変わりはない。基本は指標に示されている６項目（Ｂ）「その時にやるべき事をきちんとやる」のみ。どの校種でもどの年代ステージでも。

●保健室経営計画が大切。

北部高等学校等支部養護教諭会特別支援学校部会の取組における成果と課題

1　成　果

- 今回の研修目的であった「どこの校種にいてもどの年代であっても養護教諭の専門性から自校の健康課題を解決できるようになる」という意識は参加者全員が共通認識できた。
- 多種多様な教職員がいる中で、学校保健活動を行っていく養護教諭は、全てを自分だけで実践するのは難しい。いかに多種多様な教職員の良さを生かし、協力して安全安心な学校にしていくか、そのための養護教諭の「伝える力」が必要だと改めて学ぶことができた。
- 今まで全く経験がない特別支援学校の養護教諭として働き、これが正しいのか、こんなことで悩んでいるのは自分だけだろう、誰かに聞くのも恥ずかしいと思うこともあったが、グループワークで話し合ってみると、意外にも自分の悩みに共感してくれ、似た悩みを抱えていて驚いた。
- 若い時期には、若い時の悩み、中堅には中堅の悩み、ベテランにはベテランの悩みがあることがわかった。また知的障害特別支援学校とは異なる肢体不自由特別支援学校だからこその悩みを聞けてとても良かった。
- 「特別支援学校で活用できる保健教育の実践事例が知りたい」という課題をもって臨んだところ、具体的なアドバイスをいただき、学んだことを踏まえながら実践していこうという意欲が湧いた。

2　課　題

- 今回の研修で学んだ視点を、課題に応じて柔軟に生かしていくことが大切である。
- 課題意識を持ちながら、継続的に研修に取り組んでいく必要がある。
- コミュニケーション能力を育成することが大切である。
- 教員や学校保健関係者、地域の方々と密に連携をしていく力を育成することが大切である。
- せっかくの複数配置なので、互いに確認し合う機会を日頃から設けることができればよい。
- 目の前の職務に追われる日々なので、養護教諭育成指標の活用チェックリストを定期的に活用して、自分自身の職務を振り返る時間を設ける必要がある。